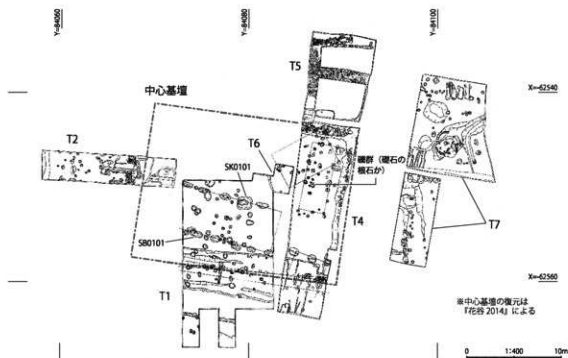




第 55 图 中心基壇周边烟查区遺構図

なかった。

第5次調査(T10)は、基壇北方平坦面における2度目の調査となるが、T8と同様に古代の遺構面は検出されず、この北方平坦面に南新造院の主要部は及んでいなかったものとして報告されている(『国府7』)。以下では、既往の調査により判明した「中心基壇」と、主要伽藍の推定地だったにもかかわらず現時点では寺院に関連する成果が得られていない「北方平坦面」について触れておく。

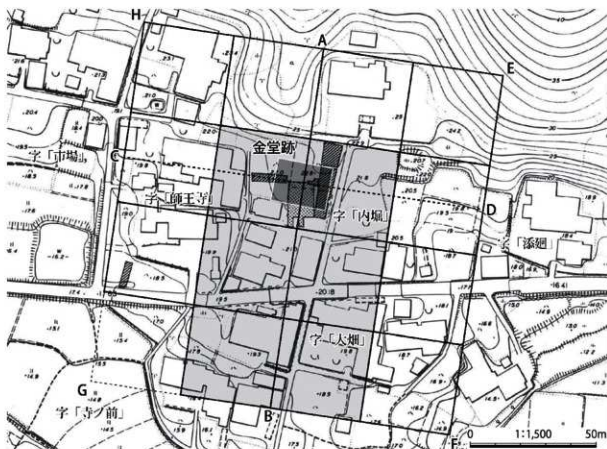
まず、中心基壇についてはT4 南東隅及び北西隅において基壇化粧の一部が検出されており、その高さは残存良好な部分で0.50～0.60mを測る。ただし、中心基壇上面は耕作による攪乱を受けており、本来の高さは現況検出面（標高約22.2m）より高かったものと想定されている。また、中心基壇上面において礎石の根石となる可能性のある礫群が1か所ではあるが検出されている。基壇の時期については、T4 北西隅の基壇石積下に造営期（後半）となる軒平瓦Ⅱ類が積み込まれていたことから、この瓦の製作年代をさかのぼらないものと考えられているが、修繕や改修の可能性も考えられることから基壇と基壇化粧の時期は分けて考える必要があろう。廃絶期については、中心基壇上から基壇と軸の異なる掘立柱建物跡SBO101が検出され、これを構成する柱穴と重複して14～15世紀ごろの土坑SKO101が存在しており、この頃には伽藍中核部においてもその機能が失われていたことが分かる。なお、本報告の寺域南辺地区の調査成果から、伽藍縁辺部においては平安時代末頃には既に管理の手が行き届いていなかったことが判明している。

この中心基壇については、『風土記』記載の「教堂」を誤記として「厳堂（金堂）」とするか、誤記とする根拠が無いと素直に「教堂（講堂）」とするかで意見が分かれる。花谷氏は基壇の大きさと通常五間四面（7間×4間）の講堂よりは、三間四面（5間×4間）のほうが建物比率と整合するこ

とから、金堂と推定している（花谷・高屋 2012、花谷 2014）。

次に、北方平坦面については、T8 で谷地の流れ込みによる遺物包含層及び無遺物層と、その下層から礫層を検出しているが地山は確認されていない。T10 では地山面において 15 世紀後半～16 世紀前半代のピットが検出されたものの、古代の遺構面は確認されなかった。このことから、中心基壇の北方平坦面には古代寺院の主要部は及んでいなかったと報告された（『国府 7』）。一方で瓦は片付けなどによって建物付近では出土しない場合や、瓦葺きではない建物が建つ場合もあるということから、北方平坦面を寺域推定地から除外することには慎重な意見もある（大橋 2016）。

寺域については、これまで考古学的成果に乏しく、花谷氏によって第 1～3 次調査で判明した中心基壇をもとに寺域の復元が試みられ（花谷 2014、第 56 図）、同時に中心基壇の規模を東西約 22m、南北約 17m と修正し⁽¹⁾、5 間×4 間の礎石建物からなる金堂跡に比定した。そして、中心基壇背後に迫る斜面裾のラインと中心基壇東西軸との距離が約 50 大尺であることから、中心基壇東西軸から南 50 大尺と南北軸の交点を方眼心として、東西 400 大尺×南北 400 大尺（約 140m 四方）の範囲を寺域として推定復元した（第 56 図）。なお、方眼の南西隅は低地部にあたり、松江市が「寺の前遺跡」として平成 6 年度に発掘調査を実施した結果、古代の遺構はなく寺域外として報告しているため（『市 62』）、ここの一マスは除外されている⁽²⁾。



第 56 図 花谷氏による寺域復元案（花谷 2014） ※方眼は 100 大尺

第3節 今回の調査成果

第1項 伽藍中軸線と寺域の復元

今回報告した第6～12次調査において南門跡を検出したことにより、伽藍中軸線の方位が確認できた。また、南新造院跡の南辺溝 SD1707 と西辺溝 SD2201 を検出し、寺域を区画する素掘りの溝が存在することも明らかとなり、寺域の復元も可能となった。

まず、伽藍中軸線としたのは、1次・2次調査で検出した中心基壇の中心点（中心基壇の中心軸と中心線の交点）と南門跡 SB1542 の中心を結んだ南北軸線であり、その方位は $N-10^{\circ}-E$ を示す。

次に、検出した寺域を区画する溝の概要について述べる。寺城南辺溝 SD1707 は T17 で検出した東西溝である。規模は上端幅 3.60 m、下端幅 1.67 m、深さ最大 1.15 m を測る。南辺全体に廻るものではなく、南門跡 SB1542 の前方は掘り残され土橋状の通路となっている。主軸方位については検出した溝の長さが 1.06 m 程しかなく、平面では南門跡と同軸にみえるが正確な方位は明確ではない。一方、寺城西辺溝 SD2201 は T22、T23、T25 で検出した南北溝であり、復元幅 3.9 m、深さ最大 0.94 m である。主軸方位は伽藍中軸線 $N-10^{\circ}-E$ と一致する。

以上の調査成果を加味し、寺域を復元したものが第 57・58 図である。中心基壇中心線（東西軸）から寺城南辺（SD1707 の底部中央）は 72.9 m（205.2 大尺）、伽藍中軸線から寺城西辺（SD2201 の底部中央）は 72.1 m（203 大尺）であり、中心基壇から 200 大尺としたエリアの外側に区画溝を配している。なお、東辺及び北辺については現時点で考古学的調査が及んでおらず、寺域区画施設は明らかになっていない。ただし、東辺については、伽藍中軸線を折り目として西辺溝を折り返すことで推定が可能である。北辺については、南辺溝を中心基壇中心線（東西軸）で折り返すと茶臼山の斜面にあたることから、これを寺域境と考えるのは不自然である。北側の地形を観察すると中心基壇の北方には平坦面があり、中心基壇中心線の 60.8 m（171.2 大尺）に地形変換点が認められることからこれを北辺とした。花谷氏が寺域の北辺としたラインよりも 8 m 奥側にあたる場所である。

以上、南新造院跡の寺域を東西 144.2 m（406 大尺）×南北 133.7 m（376.4 大尺）と想定した。

第2項 伽藍配置

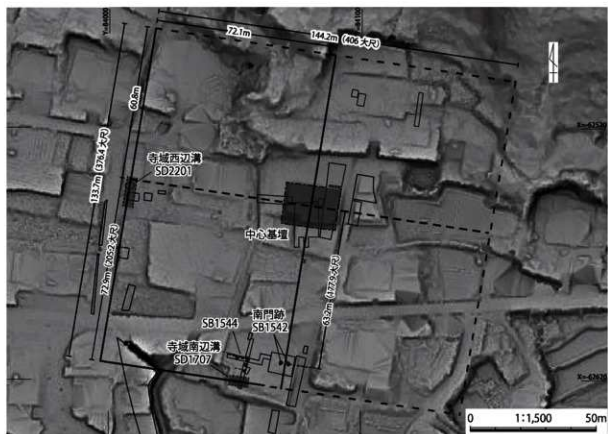
(1) 伽藍配置

南新造院跡の伽藍については中心基壇が判明しているのみで、その他の主要堂塔の位置や規模はわかっていなかった。本報告における調査で新たに南門跡 SB1542 と、寺院の付属施設の可能性が考えられる掘立柱建物跡 SB1544、さらに区画施設として寺城南辺溝 SD1707 と西辺溝 SD2201 を検出した。

南門跡 SB1542 は中心基壇中心軸（南北軸）の延長線上から検出された。2つの主柱穴と2本の支柱で構成されるものであり、建替えが行われていた。中心基壇中心線（東西軸）から南門跡までの距離は 63.2 m（177.9 大尺）である。この周辺には南新造院を建立するための整地層を確認することができ、南門跡はこの整地層を掘り込んで建てられていた。一方、整地層の下からは掘立柱建物跡 SB1829 を検出しており、この建物跡の北辺桁行と柱筋を揃えて配置された SB1543・1544 が存



第57図 調査成果に基づいて作成した寺域復元案



第58図 調査成果に基づいて作成した寺域復元案（赤色立体図）

在する。南新造院建立前の2期に属する前身建物群であり、豪族居館か地方官衙のような性格を考えている。これらの建物のうち、大型の柱穴で構成された梁間2間×桁行4間以上の掘立柱建物跡SB1544については、柱穴の柱抜取穴から南新造院跡の瓦が出土しており、南新造院が機能していた3期においても引き続き利用されていたものである。掘立柱建物跡であることから伽藍を構成する主要堂塔ではないが、南新造院建立後もしばらくの間は機能していたことになり、既往の施設を利用しながら南新造院を運営していたことが分かった。

以上、南新造院跡の伽藍については依然として不明な点が多いが、素掘りの溝で区画された寺域の中に中心基壇や南門などの主要伽藍が配置されていたことが明らかとなった。また、主要伽藍以外の建物については、前身建物の一部を利用することで寺院を運営していた様子を伺い知ることができた。

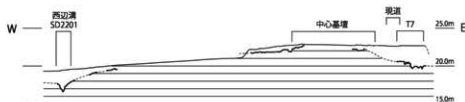
(2) 伽藍地の造成

南新造院跡は茶臼山南麓に位置することから、寺域全体が斜面にあたり、造営時には客土や切土など斜面の造成が行われたことが予測される。現在の伽藍地の地表面及び、発掘調査で検出した地山面を示したものが第59図である。南門跡及びその南側には近隣に見られる「黒ボク」が整地に利用されており、このことは客土を遠方から調達したのではなく、周辺の土壌を敷き均したものであることが分かる。また、主要堂塔が立地する場所の標高については、中心基壇上面が約22.2m、南門跡が約18.8mであり、同一水平位に造営されたものではなく、離壇状の造成がなされていたと考えられる。

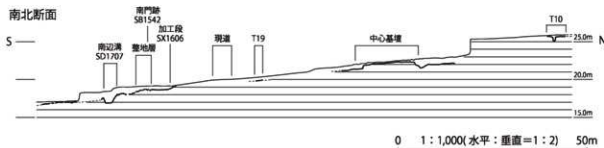
こういった造成手法については、山代郷北新造院跡（来美廃寺）も同様であり、南向き斜面を段状に加工した平坦面から基壇を持つ礎石建物4棟と総柱の掘立柱建物跡1棟が確認されている。また、出雲国分寺跡は茶臼山東麓の南東向き緩斜面に位置しており、主要堂宇を離壇状に配置するように整地が行われている。

このように、丘陵斜面や山裾の緩斜面を段状に造成して寺域を造営する手法は、広い平坦地が確保できない場所における一般的な寺院造営手法であったようだ。

東西断面



南北断面



第59図 地山検出状況図

第4節 遺構の変遷

ここでは、寺城南辺調査区と西辺調査区で検出した遺構の変遷を本文中で分類した4期の時期区分に従って整理する(第7表、第60図)。

第1期 真北方向を志向した前身建物

主軸方位がN-1°-Wのほぼ正方位を志向する総柱建物跡SB2020が該当する。柱掘方からは7世紀第2～3四半期の須恵器が出土した。柱穴の平面形は一辺が0.50m前後の方形を呈し、官衙的な性格の建物だった可能性を考えている。これ以外に正方位を志向する遺構は確認していない。

第2期 整地層下の前身建物群

建物の北辺桁行が同一直線上に揃うように配置された掘立柱建物跡3棟(SB1829、SB1543、SB1544)と加工段SX1606が該当する。SB1829が南新造院を建立するための整地層の下から検出されたことから、南新造院に先行する建物群である。主軸方位は建物群が $N-16^{\circ}-E$ 、加工段下端が $N-18^{\circ}-E$ であり、南新造院の伽藍中軸線 $N-10^{\circ}-E$ とは $6\sim 8^{\circ}$ の差をもつ。

北辺桁行の柱筋を描いて配置されていることや溝 SD1707 と SD2201 により囲まれていた可能性もあることから、豪族居館か地方官衙のような性格を考えている。

第3期 南新造院造營期

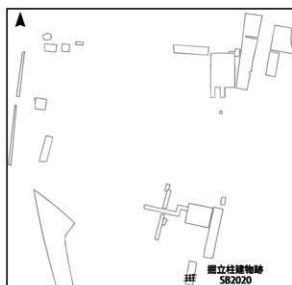
南新造院は733年に開造された『風土記』に記載があることから、この頃には既に建立されていたことは間違いなく、その創建時期について花谷氏は、軒丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅰ類・Ⅱ類を創建軒瓦とし、軒平瓦Ⅰ類の年代を平城編年と対比しておよそ720年代に比定した（花谷2014）。現在では南新造院の創建時期としておおむねこの年代が認知されている。ここでは、南新造院が機能した時期を3期とし、前半（3a期）と後半（3b期）に細分した。

3a 期 造黨期 (前半)

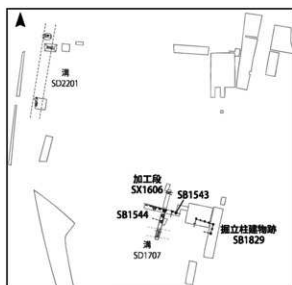
南新造院の寺域を区画する南辺溝 SD1707 と西辺溝 SD2201、南門跡 SB1542a、整地層が該当する。ただし、南辺溝 SD1707 と西辺溝 SD2201 の下層に無遺物層があり、瓦はこれよりも上層から出土することから、両者は前段階の 2 期には既に存在していた可能性も考えている。

第7表 遺構変遷表

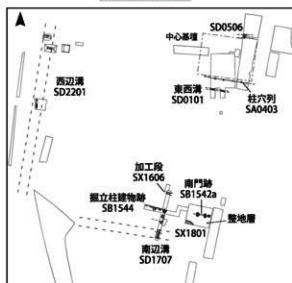
	1期	2期	3a期 (造営期前半)	3b期 (造営期後半)	4期 (衰退期)
	7C 第2四半期～	～8C 初頭720年代～	8C 中頃～	平安時代(11C 後半～12C 後半)	
殿柱建物跡 S82020	■■■■■				
竪立柱建物跡 S81829		■■■■■			
# S81543		■■■■■			
# S81544		■■■■■	■■■■■		
加工段 SX1606		■■■■■	■■■■■		
南辺溝 SX1707	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
西辺溝 SD2201	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
豊地層		■■■■■			
南門跡 S81542a		■■■■■			
# S81542b		■■■■■	■■■■■	■■■■■	
性格不明遺構 SX1801		■■■■■	■■■■■	■■■■■	
SX2406		■■■■■		■■■■■	
西辺部包含層			■■■■■	■■■■■	
自然痕跡 NR1561				■■■■■	■■■■■
# NR1558				■■■■■	■■■■■
# NR2503 ～ OS				■■■■■	■■■■■



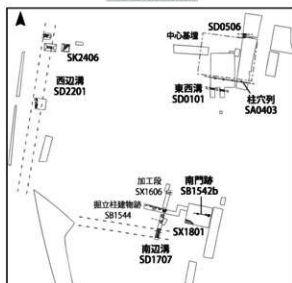
前身建物 (1期)



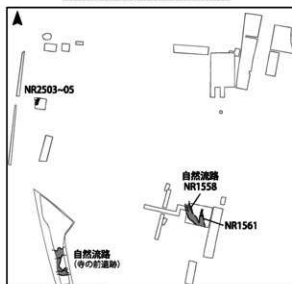
前身建物 (2期)



南新造院造営期 (前半、3a期)



南新造院造営期 (後半、3b期)



衰退期 (4期)

第60図 遺構変遷図

この他、当該期まで存続した可能性のある遺構に加工段 SX1606 と掘立柱建物跡 SB1544 がある。これらは整地層の下から検出した SB1829 と同じ 2 期のものであるが、SB1544 の柱抜取穴や加工段覆土からは 8 世紀第 2 四半期～8 世紀第 4 四半期頃の須恵器や南新造院の瓦が出土するため、少なくとも創建当初には存続していた可能性が高い。伽藍を構成する主要堂塔ではないにしろ、南新造院を運営するために機能していた建物であったと考えられる。

寺城南辺溝は南門跡の前面では掘り残され土橋状の通路となっていることが分かったほか、南門跡やその周辺で寺院建立に伴って盛られた整地層を確認した。南門跡はこの整地層を掘り抜いて建てられていた。

3b 期 造営期（後半）

南門跡 SB1542 が同位置で建替えられた時期である。建替え前の南門跡 SB1542a の柱抜取穴から軒丸瓦Ⅱ類 b が出土していることから、新段階の SB1542b は 8 世紀中頃以降のものである。また、瓦を含んだ包層層を掘り込んで作られた土坑 SK2406 も当期の遺構とした。9C 前葉の須恵器を含んだ土坑であり、SK2406 の第 11 層（第 44 図）は焼土や炭化物を多量に含んでいる状況から、火災に伴う廃棄土坑の可能性を考えている。

4 期 衰退期

南門の中央部及びその脇に形成された自然流路（NR1561、R1558）と、寺城西辺溝を壊して形成された自然流路（NR2503～NR2505）を衰退期のものとした。NR1558 からは平安時代末頃（11 世紀後半～12 世紀後半）の遺物が出土しており、この頃には中心伽藍を外れた寺域縁辺部については、管理の手が十分に及んでいなかったことを示すものと考えている。西側に隣接する寺の前遺跡においても同時期の流路が確認されている。

【注】

- (1) 花谷氏は中心基壇規模の再検討にあたり以下の 2 点を修正した。①基壇北辺について、基壇外装の内側ではなく基壇外装の外側をとるものとした。②基壇西辺について、第 1 次調査時の T2 南側に露出した断面調査（「風土記Ⅳ」）で国土座標 Y = 84,304 から西 5.2m のところ（Y = 84,299）に基壇西端があるとされ、それは T2 瓦溜よりやや東に位置するものとした。以上の検討事項から、基壇規模を東西約 22m × 南北約 17m と推測した。
- (2) 寺の前遺跡は南新造院跡の南西側に隣接する遺跡であり、丘陵よりも一段低い谷水田に立地する。南門跡の遺構面が 18.90m、寺城南辺溝の底部が 16.45m であるのに対し、寺の前遺跡の遺構面は 15.30m である。南新造院跡に関連した遺構は確認できなかったが、円面硯や須恵器の灯明皿、コンテナ 10 箱分の瓦や鶴尾の破片が出土している。（『市 62』）

【参考文献】

- 梅原未治 1918 「出雲国分寺と四王寺の址」『歴史地理』第 31 巻第 5 号
 大橋泰夫 2016 『出雲国誕生』吉川弘文館
 恩田清 1962 「地名（こくてふ）を追って 一出雲国庁跡のナゾに迫る」『島根新聞』4 月 16 日付
 岸崎左久次時照 1683 『出雲風土記抄』（桑原家本、天和 3 年）
 黒沢長尚 1717 『雲陽誌』
 後藤蔵四郎 1937 『出雲国風土記註解』島根県教育委員会
 柴田常恵 1907 「四王寺」『宗教界』第 3 巻第 1 号
 島根県教育委員会 2007 『山代郷北新造院跡 史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院跡（来美庵寺）発掘調査報告書』
 島根県教育委員会 2011 『史跡出雲国府跡』7 附編 山代郷南新造院跡
 野津左馬之助 1926 『島根縣史 第五編 國司政治時代』島根縣内務部島根縣史編纂掛
 花谷 浩・高屋茂男 2012 「出雲国意宇郡山代郷南新造院跡と出雲郡大寺谷遺跡の同范瓦について」『しまねミュージアム協議会共同研究紀要』第 2 号 pp.19～37
 花谷 浩 2014 「山代郷南新造院跡（四王寺跡）再考」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第 4 集 pp.11～24
 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1995 『寺の前遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書 第 62 集

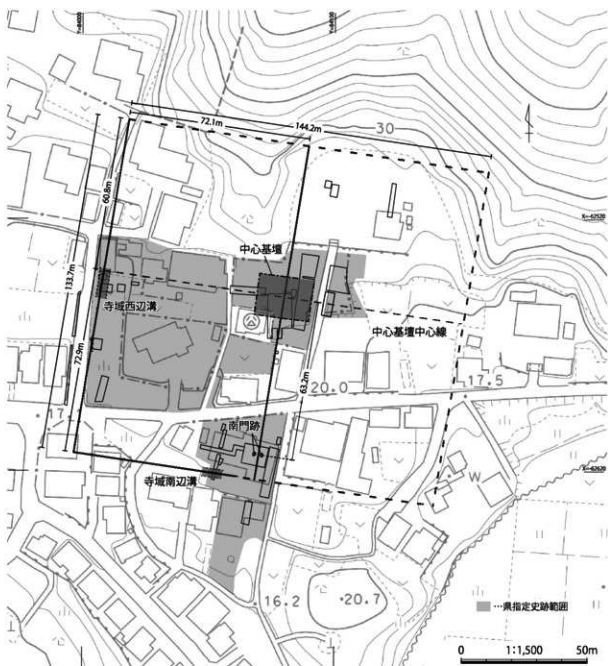
第6章 結語

山代郷南新造院跡は、飯石郡の少領であった出雲臣弟山が建立した寺院である。出雲臣は出雲地域における最有力氏族であり、弟山は天平18年(746)3月に出雲臣廣嶋の後を継いで出雲国造に就任している。建立者が特定することのできる地方寺院は全国的にも稀有な例であり、出雲の古代史において重要な位置を占める遺跡である。また、南新造院跡の瓦窯の位置が特定されている点も重要と言える。この山代郷南新造院瓦窯跡は、南新造院跡の南西150mの丘陵に位置する。低丘陵北斜面に瓦窯跡が3基並んだ状態で検出された。『風土記』に登場する山代郷中の2つの新造院に瓦を供給していたことや、窯詰め方法などが解明されている。操業時期は8世紀前半の新造院創建期から生産を行っていたが、国分寺の創建以降は生産を止め、南新造院で必要な修理用の瓦は出雲国分寺瓦窯跡から供給されたことが分かっており、出雲地域における古代寺院の建立と造瓦の関係を究明する上でも重要である。

さて、今回報告した第6～12次調査においては、中心基壇中心軸上において南門跡SB1542を検出したほか、寺域を区画する南辺溝SD1707及び西辺溝SD2201を確認し、寺域規模の復元が可能となった。さらに、南新造院が建立される前段階において、規格的に配置された掘立柱建物跡群の存在も明らかとなった。これらの建物群の中には南新造院建立後も引き続き機能した建物跡SB1544もあり、既往の施設を利用しながら南新造院を運営していたことも分かった。この前身建物の性格としては、その規格性から地方官衙や豪族居館の可能性を指摘したが、『風土記』に南新造院の造営者として登場する弟山自身の居館を転用した可能性も選択肢の一つとして考慮に入れておく必要がある。いずれにしても、南新造院の建立過程の一端を示すものであり、地方寺院の成立を理解する上で重要な成果と言える。

今後の課題として、現時点で判明している主要堂塔は中心基壇と南門跡だけであり、その具体的な様相は不明点があげられる。また、今回の報告では第1次～5次調査で出土した遺物については十分な検討が行えていないため、それらも含めた総括的な検討が求められる。さらに、伽藍地を段状に造成したことが判明したが、部分的な調査のため、その造成範囲についても分かっていない。伽藍配置等の解明に向けて、引き続き計画的な発掘調査が望まれる。

最後に、南新造院跡の遺跡内及び周辺については、付近の開発に伴って急速に宅地化が進んでおり、加えて空き家の増加による土地売却の動きが活発になりつつある。遺跡の早急な保護と公有地化を図る必要がある。



第 61 図 県指定史跡の範囲図

掲載遺物一覧表

瓦埴等

※寸法のカッコ書きの数字は、復元または推定寸法を示す。

遺物番号	出土位置	種別	寸法 (cm)		厚さ	重量 (kg)	組成	色調	調整手法	備考
			長さ	幅						
23-3	T17 SP1701	丸瓦 (有段式)	玉縁長: 4.8	(8.0)	段高: 1.5 筒厚: 2.4	0.31	軟質	灰白色	凸面: ヘラケズリ、ナデ 凹面: 布目 側面: ヘラケズリ 側面: ヘラケズリ	
23-4	T15 SP1509	平瓦	(18.4)	(16.1)	1.8	0.86	硬質	灰褐色	凸面: 縄叩き 凹面: 布目、ヘラケズリ、糸切痕	
25-8	T16 SX1606	軒平瓦	(6.0)	瓦当幅: (10.6)	—	0.19	硬質	灰色	摩耗著しい	軒平瓦0類
25-9	T16 SX1606	軒平瓦	(6.0)	瓦当幅: (10.7)	—	0.21	硬質	灰色	摩耗著しい	軒平瓦0類
28-1	T18 SP1501	軒丸瓦	(8.5)	—	瓦当厚: 2.6	0.19	硬質	灰色	瓦当裏: 指圧痕	軒丸瓦II類b
38-4	T18 NR1558	平瓦	(10.4)	—	1.9	0.27	軟質	にぶい 褐色	凸面: 縄叩き 凹面: 布目	
40-2	T14 腰瓦層	軒平瓦	(5.2)	瓦当幅: (9.9)	瓦当厚: 5.5	0.48	軟質	にぶい 褐色	凸面: タテヘラケズリ・ナデ 凹面: 布目・ヨコヘラケズリ 側面: タテヘラケズリ	軒平瓦II類
40-3	T17 腰瓦層	軒丸瓦	(10.5)	瓦当幅: 16.3	丸瓦厚: 3.5	2.14	軟質	淡黄色	瓦当周縁: ナデ 瓦当裏: 指ナデ	軒丸瓦II類b
40-4	T18 G859	丸瓦 (無段式)	(13.4)	—	2.3	0.44	やや 軟質	にぶい 黄褐色	凸面: 縄叩き後ナデ 凹面: 布目 側面: ヘラケズリ 端部: ヘラケズリ	
40-5	T18 G891	丸瓦 (無段式)	(13.5)	—	1.8	0.19	硬質	黄灰色	凸面: ヨコナデ 凹面: 布目 側面: ヘラケズリ	
46-1	T24 T1層	丸瓦 (有段式)	(10.9)	(8.2)	段部: 1.1 筒厚: 2.1	2.4	軟質	灰白色	凸面: ナデ 凹面: 布目、ヘラケズリ 側面: ヘラケズリ 端部: ヘラケズリ	
46-2	T24 T2層	平瓦	(9.0)	(16.7)	2.4	0.55	硬質	暗灰色	凸面: 縄叩き、磨れ砂 凹面: 布目	
46-3	T24 T1層	平瓦	38.0	28.0	1.9	3.83	硬質	黒色	凸面: 縄叩き、糸切痕 凹面: 布目、糸切痕 側面: ヘラケズリ 端部: ヘラケズリ	完形品
48-1	T22 5層	軒丸瓦	瓦当径: 14.3	—	瓦当厚: 3.7	0.93	硬質	灰色	瓦当周縁: タテヘラケズリ 瓦当裏: ヘラケズリ、ナデ	軒丸瓦I類B
48-2	T23 6層	軒丸瓦	—	—	瓦当厚: 3.6	0.07	硬質	灰白色	瓦当周縁: タテヘラケズリ 瓦当裏: ヘラケズリ	軒丸瓦II類か
48-3	T23 6層	軒丸瓦	—	—	—	0.11	軟質	灰色	瓦当周縁: タテヘラケズリ	軒丸瓦II類か
48-4	T22 5層	軒平瓦	(13.0)	瓦当幅: (11.1)	瓦当厚: 4.4	0.91	軟質	灰色	凸面: ナデ 凹面: ヨコヘラケズリ後ナデ 側面: ヘラケズリ、ナデ	軒平瓦0類
48-5	T22 5層	軒平瓦	(5.7)	瓦当幅: (5.9)	—	0.08	軟質	灰色	凸面: ヘラケズリ、ナデ	軒平瓦0類か
48-6	T23 6層	軒平瓦	(6.0)	瓦当幅: (9.8)	瓦当厚: 4.4	0.19	軟質	灰白色	凸面: ナデ	軒平瓦I類
48-7	T22 5層	丸瓦 (有段式)	(3.7)	—	段高: 1.6 筒厚: 2.1	0.04	軟質	浅黄色	凸面: ナデ 凹面: 布目	
48-8	T24 T4層	丸瓦 (有段式)	(6.8)	(4.5)	段部: 1.2 筒厚: 1.6	0.07	軟質	浅黄褐色	凸面: ナデ 凹面: 布目、指圧痕	
48-9	T23 8層	丸瓦 (無段式)	(20.3)	(10.5)	1.7	0.64	軟質	褐色	凸面: 縄叩き、ナデ 凹面: 布目	
49-1	T23 7層	平瓦	(16.8)	(13.6)	2.5	0.99	硬質	暗白色	凸面: 縄叩き、磨れ砂 凹面: 布目	
49-2	T23 6層	平瓦	(18.9)	(14.2)	2.3	0.92	軟質	灰白色	凸面: 縄叩き、磨れ砂 凹面: 布目、ヨコナデ、糸切痕	
50-1	T23 8層	埴または 製斗瓦	(20.4)	(13.6)	1.8	0.82	硬質	灰褐色	上面: 糸切痕 下面: 糸切痕、縄叩き後ナデ	
50-2	T24 T4層	埴または 製斗瓦	(16.2)	(13.3)	2.0	0.61	軟質	浅黄褐色	上面: 糸切痕 下面: 糸切痕、縄叩き 側面: ヘラケズリ 端部: ヘラケズリ	
52-2	T25 NR2503-05	軒平瓦	(2.2)	瓦当幅: (3.0)	—	0.02	軟質	灰色	摩耗著しい	型式不明
54-2	T23 表土	軒丸瓦	—	—	3.7	0.74	硬質	暗灰色	瓦当周縁: タテヘラケズリ 瓦当裏: ナデ、ヘラケズリ	軒丸瓦II類b

土器

※寸法のカッコ書きの数字は、復元または残存寸法を示す。

遺物 番号	出土位置	種類・ 部位	寸法 (cm)		構成	色調	調査手法	備考
			口径	底径				
18-1	T20 SP2009	須恵器 蓋	—	—	(1.8)	良好 外 灰色 内 灰白色	外 ヘラケズリ後ナデ、ヘラ記号 内 タテ・ヨコナデ	大谷欄年5期(7C第2～3四半期)
18-2	T20 SP2004	須恵器 高杯	—	—	(2.5)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 タテ・ヨコナデ	三角または輪状の二方透かし。 大谷欄年5期以降
23-1	T17 SP1701	須恵器 高台付杯	—	(7.0)	(2.1)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	国府欄年第3～5型式(8C第2四半期～9C前期)
23-2	T17 SP1701	須恵器 無高台杯	11.5	7.3	4.8	良好 外 灰白色 内 灰白色	外 回転ナデ、回転糸切歯 内 回転ナデ	国府欄年第2～5型式(7C末葉～9C前期)
25-1	T16 SX1606	土師器 甕	(31.2)	—	(5.5)	良好 外 にぶい黄褐色 内 にぶい黄褐色	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	
25-2	T16 SX1606	土師器 甕・把手	長さ (6.4)	幅 6.1	—	良好 外 灰黄色 内 にぶい黄褐色	外 ナデ 内 タテヘラケズリ	牛角状
25-3	T16 SX1606	須恵器 蓋	—	—	(1.0)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、ヘラケズリ 内 タテ・ヨコナデ	市タン試つまみ径:2.6cm 国府欄年第3～4型式(8C第2～4四半期)
25-4	T16 SX1606	須恵器 蓋	16.0	—	(1.8)	良好 外 褐灰色 内 褐灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	国府欄年第3～4型式か
25-5	T16 SX1606	須恵器 高台付杯	—	8.0	(3.0)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、ヨコナデ、糸切歯 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	国府欄年第1～2型式(7C末葉～8C第1四半期)
25-6	T16 SX1606	須恵器 無高台杯	(14.2)	(7.0)	4.6	良好 外 灰色 内 灰色	外 無調整、回転糸切歯 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	国府欄年第2～3型式(7C末葉～8C第2四半期)
25-7	T16 SX1606	須恵器 甕・底部	—	(10.0)	(2.4)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、回転糸切歯 内 回転ナデ	国府欄年第3～4型式
30-1	T17 SD1707	須恵器 高台付皿	—	(9.8)	(2.4)	不良 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、タテ・ヨコナデ、 回転糸切歯 内 回転ナデ、ナデ	国府欄年第4～5型式(8C第3四半期～9C前期)
32-1	T18 SX1801	須恵器 蓋	—	—	(1.1)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	国府欄年第1型式(7C後葉)
32-2	T18 SX1801	須恵器 杯	(13.0)	—	(4.0)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	国府欄年第1型式
33-1	T18 豊地層 (19層)	須恵器 蓋	—	—	(1.2)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	国府欄年第2型式(7C末葉～8C第1四半期)
38-1	T15 NR1558	土師器 足高高台 付杯	—	(6.5)	(2.1)	良好 外 淡黄色 内 淡黄色	摩耗著しい	国府欄年第6～7型式(9C中葉～10C前半)
38-2	T15 NR1558	土師器 柱状高台	—	(5.6)	(4.2)	良好 外 にぶい褐色 内 にぶい褐色	外 タテ・ヨコナデ、回転糸切歯 内 タテ・ヨコナデ	国府欄年第9～10型式(11C後半～12C後半)
38-3	T15 NR1558	磁器 白磁碗	—	—	(1.1)	良好 外 灰白色 内 灰白色	内外面 施釉	大宰府欄年IV期(11C後半～12C前半)
40-1	T16 耕作土	須恵器 蓋	(14.0)	—	(1.8)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、ヘラケズリ 内 回転ナデ	国府欄年第1型式
45-1	T24 9層	土師器 無高台杯	(14.6)	—	(5.6)	良好 外 にぶい褐色 内 にぶい黄褐色	外 タテ・ヨコナデ 内 タテ・ヨコナデ	国府欄年第3型式(8C第2四半期)
45-2	T24 10層	土師器 甕	(19.2)	—	(5.2)	良好 外 にぶい褐色 内 灰白色	摩耗著しい	
45-3	T24 10層	須恵器 蓋	(19.0)	—	3.0	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	宝珠つまみ径:2.3cm、国府欄年第3～4型式、転用破
45-4	T24 9層	須恵器 蓋	—	—	(1.8)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	算盤状つまみ径:2.8cm 国府欄年第4～5型式
45-5	T24 9層	須恵器 蓋	(17.4)	—	(3.2)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、ケズリ 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	国府欄年第3～4型式
45-6	T24 9層	須恵器 蓋	(14.2)	—	(1.6)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	国府欄年第3～5型式
45-7	T24 10層	須恵器 蓋	(17.8)	—	(1.5)	良好 外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ、ケズリ	
45-8	T24 9層	須恵器 高台付杯	—	11.1	(2.4)	良好 外 灰色 内 褐灰色	外 回転ナデ、回転糸切歯 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	国府欄年第3～5型式
45-9	T24 11層	須恵器 無高台杯	(14.3)	(9.5)	4.3	良好 外 灰白色 内 灰白色	外 回転ナデ、回転糸切歯 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	国府欄年第2～5型式

土器

※寸法のカッコ書きの数は、復元または推定寸法を示す。

遺物 番号	出土位置	種類	群種・ 部位	寸法 (cm)			形状	色調	取付手法	備考
45-10	T24 9層	須恵器	灯明皿	(9.8)	(6.0)	2.5	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、ナデ、回転糸切歯 内 タテ・ヨコナデ	
45-11	T24 11層	須恵器	灯明皿	10.0	6.2	2.9	良好	外 灰色 内 褐灰色	外 回転ナデ、回転糸切歯 内 回転ナデ	
45-12	T24 10層	須恵器	鉄鉢形 土器	(15.6)	—	(5.8)	良好	外 灰褐色 内 灰褐色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	
45-13	T24 9層	須恵器	鉄鉢形 土器	(21.6)	—	(9.6)	良好	外 灰赤色 内 灰赤色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ、ナデ	
45-14	T24 10層	須恵器	水甕・ 罌部	4.1	—	(8.7)	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	自然胎付着
47-1	T23 6層	土師器	無高台杯	—	(8.6)	(1.6)	良好	外 褐色 内 褐色	外 タテ・ヨコナデ 内 タテ・ヨコナデ	国府編年第6型式 (9C 中葉～後葉)
47-2	T23 8層	土師器	無高台杯	(14.6)	(11.5)	(3.6)	良好	外 にぶい褐色 内 にぶい褐色	外 タテ・ヨコナデ 内 タテ・ヨコナデ	国府編年第4型式 (8C 第3～4 四 半期) か
47-3	T23 6層	土師器	無高台皿	(13.4)	(9.0)	1.4	良好	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 タテ・ヨコナデ、回転糸切歯 内 タテ・ヨコナデ	国府編年第5型式 (8C 末葉～9C 前期) か
47-4	T23 6層	須恵器	高台付杯	(12.6)	(7.3)	4.0	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、ナデ 内 回転ナデ、ナデ	国府編年第2型式
47-5	T23 8層	須恵器	無高台 杯か	(13.4)	—	(3.3)	良好	外 褐色 内 褐色	外 タテ・ヨコナデ 内 タテ・ヨコナデ	国府編年第2～5型式
47-6	T23 6層	須恵器	無高台杯	—	(7.8)	(1.9)	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、静止糸切歯 内 回転ナデ、ナデ	国府編年第2型式
47-7	T22 5層	須恵器	灯明皿	(10.8)	(7.4)	2.4	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、静止糸切歯 内 回転ナデ	
47-8	T24 14層	須恵器	高台付皿	(20.2)	(13.0)	4.9	良好	外 灰褐色 内 灰褐色	外 回転ナデ、静止糸切歯 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	転用破
47-9	T24 14層	須恵器	高台付皿	26.5	18.4	3.9	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、回転糸切歯 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	転用破
47-10	T24 14層	須恵器	無高台皿	(15.0)	(8.2)	2.4	良好	外 灰褐色 内 灰褐色	外 回転ナデ、回転糸切歯 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	転用破
47-11	T23 6層	須恵器	長頸型・ 口縁部	(15.6)	—	(3.4)	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	国府編年第5型式か
47-12	T23 6層	須恵器	西・底部	—	(10.0)	(6.1)	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、ヨコナデ 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	
47-13	T24 14層	須恵器	鉄鉢形 土器	(21.8)	—	(8.5)	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ、タテ・ヨコナデ	
47-14	T24 14層	須恵器	不明	—	—	(4.2)	良好	外 灰褐色 内 灰褐色	外 回転ナデ 内 回転ナデ、当て具痕	
52-1	T25 NR2503-Q5	須恵器	杯	—	—	(2.2)	良好	外 灰白色 内 灰白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	
54-1	T24 腰皿層 (6層)	土師器	無高台杯	(12.0)	(8.0)	4.1	やや 不良	外 にぶい褐色 内 灰白色	外 タテ・ヨコナデ、回転糸切歯 内 タテ・ヨコナデ	国府編年第6～7型式

写 真 图 版



1 寺城南辺地区 遠景 (南から)



2 寺城西辺地区 遠景 (南西から)

図版2 寺城南辺地区



1 T20 調査後全景（南から）



2 SB2020 段下げ後（南から）



1 SB2020 (SP2004) 半截状況 (東から)



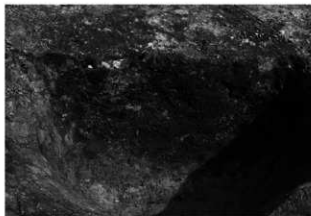
3 T14 遺構検出状況 (南西から)



2 SB2020 (SP2005) 半截状況 (南西から)



4 T14 西壁 土層堆積状況 (東から)



5 SB1829 (SP1404) 半截状況 (西から)



6 SB1829 (SP1405) 半截状況 (西から)

図版4 寺城南辺地区



1 SB1829 (T14) 完掘状況 (南から)



2 T18 調査後全景 (南西から)



1 T18 東壁 土層堆積状況 (西から)



2 T18 西壁 土層堆積状況 (東から)



3 SB1829 (T18) 全景 (南東から)